

考 察

岡山大学大学院教育学研究科 副研究科長
教授 熊谷 愼之輔

1. 本調査研究における3つの視点～現在・過去・未来～

本調査研究を概観すると、問2の「あなたは『学習』が必要だと思いますか。」、問4(1)の「あなたは最近1年間に学習を行ったことがありますか。」、問3(1)の「あなたは自ら進んで学習を行いたいと思いますか。」という3つの問いを中心に構成されていることがわかる。つまり、「学習の必要性」、「最近1年間の学習行動」、「今後の自主的な学習希望」の現在・過去・未来という視点を重視した調査研究であると言ってよい。

同じような視点をもった先行研究としては、NHK放送文化研究所が全国規模で成人の学習の実態やニーズを探った「学習関心調査」の結果が有名である¹⁾。少々古いものであるが、1982年から1998年まで5回にわたって継続的に学習関心率と学習行動率を調査している。その調査結果は、成人のおよそ9割が今後学んでみたいという学習関心をもっており、4割以上の成人が過去1年間になんらかの学習を行っていることを示していた。

調査項目等の違いから単純に比較することはできないが、本調査結果でも、9割近くの回答者が現在、学習の必要性を感じており(図5)、7割以上が今後も進んで学習したいと回答していた(図28)。「学習関心調査」の結果と同様に、本県における学習の必要性や学習関心の高さをうかがい知ることができる。さらに、興味深いことに、「学習関心調査」における学習行動率が4割以上であったのに対して、本調査結果では、56%(美作地域では67%)もの人が「最近1年間に学習を行ったことがある」と回答していた(図10、14)。これは、本県において生涯学習の機会が整備されてきたからこそその結果であり、本県の生涯学習振興の成果と捉えることもできるだろう。

ただそうはいつでも、学習関心と学習行動のギャップという問題はどうしても残る。すなわち、ここまでの調査結果から、いくら旺盛な学習関心をもっていても、それらの人々のすべてが学習行動を起こしているわけではないのである。とくに、成人の場合、様々な学習阻害要因によって学習行動に結びつかないことも多く、これまでの調査研究においても指摘がなされてきた。なかでも、学習阻害要因の第1位はどの調査結果の場合でも仕事や家事で忙しく「時間」がとれないであり、それに「費用」や「情報」、「機会や場所」といった阻害要因が続いている²⁾。やはり本調査結果においても同様に、「忙しくて、時間がとれない」が36.5%ともっとも高い数値を示していた(図38)。このように、成人の場合、彼・彼女らをとりにくく生活の状況や学習機会を提供する側の問題、つまり外的で状況的な要因に回答が集中しやすい傾向がある。たしかに、職業人、親、市民など、様々

な社会的役割をもつ成人には、生活していくうえでの制約が多いため、こうした要因に回答が集中するのもうなずける。その一方で、様々な責任をもつ成人だからこそ、学習に参加しない理由を社会的に容認されやすい項目に集めたとみることもできる³⁾。

2. 学習経験のふくらみ～公民館の利用と地域活動への参加～

そうした点も考慮に入れながら、本調査研究の「学習を行いたくない理由」の結果を分析してみると、「公民館利用の有無」との関連において興味深い傾向がみられた。その結果を示したのが、図 42 の「学習を行いたくない理由と公民館利用の有無」である。図をみると、「一緒に学習する仲間がいない」を回答したなかでは、62.5%の人が「公民館を利用したことがない」と回答しており、公民館不利用の高さが目立つのである。この結果をみると、公民館を利用したかどうかの経験も学習行動に影響を与えていそうだ。

そこで、公民館利用の有無（図 43）に着目して本調査結果をみてみると、公民館を利用したことがあると回答した方が、学習の必要性を感じて（図 47：91.4%）、過去にも学習を行っており（図 48：65.3%）、今後の学習意欲も高い（図 49：82.0%）のである。こうしてみると、公民館への参加による学習経験が、個人の内面に影響を与えて、さらなる学習への好循環を生んでいると考えられる。ちなみに、地域活動への参加の有無（図 67）との関連でも、同様に、地域活動に参加したことがあると回答した方が、学習の必要性を感じて（図 68：90.3%）、過去にも学習を行っており（図 69：63.0%）、今後の学習意欲も高い（図 70：81.1%）という傾向を示していた。

こうした学習行動の連鎖については、矢野眞和による調査研究が参考になる⁴⁾。彼の研究によると、過去5年間に学習したことのある者のうち、66.3%が現在も学習活動を行っていた。その一方で、過去に学習を行っていない人のじつに94.7%は現在も学習していないことが示されていた。矢野は、こうした学習経験が次の新しい学習や将来の学習希望をいっそう強めることを「学習経験のふくらみ」と名づけている。本調査研究にひきつけてみると、公民館の利用や地域活動への参加という経験がまさに次の学習へのふくらみとなって連鎖していることがうかがえる。さらに、公民館を利用したことがあると回答した人の方が地域活動への参加も高いという結果（図 71）を考えあわせると、公民館利用を促していくことが人々の学習活動を充実させ、さらなる生涯学習の推進につながるということを、本調査研究の結果から、あらためて読み取ることができるだろう。

3. 学習経験のちぢみと無関心層への支援～公民館を利用したことがない人々への注目～

ただし、ここで注意しなければならないのは、矢野が「学習経験のふくらみ」の法則との対比において指摘した、学習の途中で学習を放棄したり意欲を失ってしまったりする「学習経験のちぢみ」という傾向のことだ。「学習経験のふくらみ」傾向の人々は積極的な学習者であり、誤解を恐れずに言うと、あまり支援をしなくても継続的に学習していく

ことができるだろう。しかし、「学習経験のちぢみ」傾向にある人々に対しては、積極的な支援を講じなければ学習行動が継続せず、ふくらみ傾向のある人々との学習格差がますます拡大することになる。さらに、ちぢみ傾向以上に気をつけなければならないのは、過去も現在も学習経験がない「未経験」の人たちである。しかも、将来の学習希望も弱いとなれば、学習の「無関心層」と位置づけた方がいいかもしれない。そういう意味では、本調査研究で「公民館を利用したことがない」と回答した人々に注目することが重要になってくる。

まず、彼・彼女らの特徴を確認してみると、年代としては「10～20歳代（55.0%）」と「30～40歳代（51.9%）」に多く（図44）、職業では「会社員、会社役員（54.5%）」、「パート・アルバイト（50.5%）」、「学生、訓練生（50.0%）」に多い傾向がある（図45）。地域別では、美作地域には少なく（図46：32.9%）、この傾向が美作地域における本調査への肯定的な回答が多くなっている要因につながっているのかもしれない。また、公民館を利用したことがない人たちは、上述した利用したことがある人たちに比べ、相対的に学習の必要性を感じておらず（図47：15.5%）、過去の学習経験も少なく（図48：55.7%）、今後の学習意欲も低い（図49：36.1%）。こうしてみると、やはり彼・彼女らに焦点をあてた学習支援が重要だということに気づかされるだろう。

さらに、彼・彼女らの特徴を探ってみると、図50にみられるように、公民館が「なにをやっているかわからない」と回答した率の高さが気になる（39.7%）。しかも、若い世代になるほど、公民館が「なにをやっているかわからない」の回答率が高くなる傾向もみられた。もちろん、本県の公民館が厳しい状況のなかで、しっかりとした活動を行っていることは言うまでもないが、こうした彼・彼女らの特徴や傾向をふまえてのさらなる改善や積極的な学習支援の必要性が、本調査研究の結果から浮かび上がってくるだろう。

【注】

- 1) NHK 放送文化研究所編『日本人の学習—成人の学習ニーズをさぐる—』第一法規、1990年。
- 2) 熊谷慎之輔「学習行動の多様性と特性」鈴木真理・松岡廣路編『社会教育の基礎』学文社、2006年、pp.118-129。
- 3) 佐々木正治編『21世紀の生涯学習』福村出版、2000年、p.99。
- 4) 矢野眞和「生涯学習における参加と不参加の構造—学習希望は顕在化するか—」『大学論集』第12集、広島大学 大学教育研究センター、1983年、pp.39-54。